

造成ヨシ帯における漁場生産力の把握

上野 世司・上垣 雅史・根本 守仁

1. 研究目的

琵琶湖の周辺に存在するヨシ帯は、その多くが開発行為等により消失し魚類繁殖場としてあるべき場所が失われた。そこで、新たに造成されたヨシ群落の造成地区を対象に漁場としての生産能力を調査した。

2. 研究方法

湖北町海老江地先（丁野木漁場）の造成ヨシ群落内において4月3日から7月8日までの間、週1回の頻度で計14回にわたり、塩ビパイプ枠（50cm×50cm）にキンランを取り付けた産卵基体を7箇所設置し、フナ類およびコイの産卵状況を調査した（図1）。

湖北町野田沼の造成ヨシ群落内において4月3日から8月6日までの間、週1回の頻度で計17回にわたり、産卵基体を5箇所設置し、フナ類およびコイの産卵状況を調査した。

ニゴロブナ稚魚の冬期までの生残率を調査するため、ALC標識を施した稚魚を放流した。



図1 丁野木漁場造成ヨシ帯における調査基点。

3. 研究結果

産着卵が認められたのは4月10日から6月3日までの間の9回であった（図2）。産着卵数から当該造成ヨシ群落（4.0ha）の総産着卵数は約15.3億粒と推定された。

産着卵が認められたのは4月10日から7月29日までの間の13回であった（図3）。産着卵数から当該造成ヨシ群落（0.3ha）の総産着卵数は約1.7億粒と推定された。

ALC標識を施した全長20mm稚魚24000尾を丁野木漁場に7月10日に放流し、追跡調査中

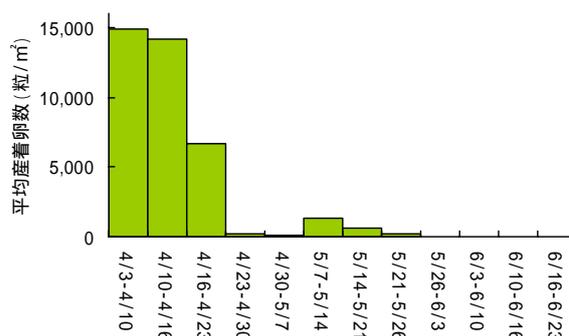


図2 丁野木漁場造成ヨシ帯におけるコイフナ類の産着卵数の推移。

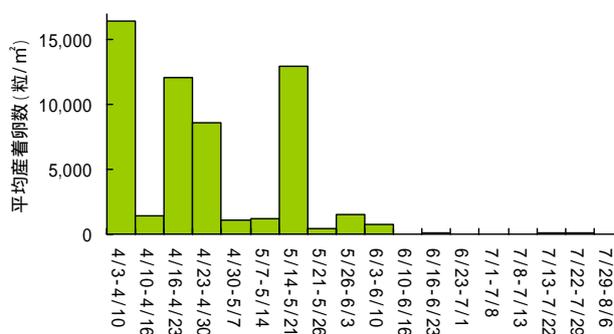


図3 野田沼造成ヨシ帯におけるコイフナ類の産着卵数の推移。